

国際シンポジウム 開催報告

「国際的視野から眼差す日本メディアと大衆文化史
—放送 100 周年に見出す知と課題—」

“Global Perspectives on Japanese Media and Popular Culture History:
Critical Lessons from a Century of Broadcasting”

主催：国際日本文化研究センター・アムステルダム大学

共催：「国際日本研究」コンソーシアム

後援：一般財団法人 国際日本文化研究交流財団

開催日：令和 7（2025）年 7 月 11 日（金）～13 日（日）

開催場所：国際日本文化研究センター 講堂、第 1 共同研究室

※オンライン配信あり

参加者数：延べ 329 名（登壇者 23 名及びオンライン参加者を含む）

【概要 ー日本メディアと大衆文化史をなぜ今、国際的に考えるのかー】

日本は 2025 年に「昭和 100 年」「戦後 80 年」とともに「放送 100 周年」を迎えた。メディアを対象とする既存の研究は、ラジオならラジオ、テレビならテレビと、単一のメディアを扱う傾向にある。しかし、1925 年に日本初のラジオ放送が始まって以降、書籍、新聞、雑誌、映画、ラジオ、テレビ、ウェブ、SNS と、日本の人々はさまざまに発展を遂げたメディアから多岐にわたる情報を得て、文化的生活を営んできた。こうした複数のメディアにより生み育まれた数々の大衆文化は、海を越えて国外の人々にも広く伝わり、日本と海外諸国の架け橋となって国際交流を支えてきた。よって、複数のメディアを総合して社会生活への影響を分析し、文化形成の過程を通時的に解明するには、複数メディアによっていかなる大衆文化が育まれてきたか、その歴史を多角的かつ包括的に探究する必要がある。加えて、この「日本メディアと大衆文化史」の精緻な検討には、その実態と展望を国内に押しとどめずにグローバルな視点から、批判的に検証することが不可欠である。

本国際シンポジウム「国際的視野から眼差す日本メディアと大衆文化史ー放送 100 周年に見出す知と課題ー」（[日本語](#)・[英語](#)ウェブサイト）は、NHK の前身組織である東京放送局がラジオ本放送を開始した 1925 年 7 月 12 日を記念し、2025 年 7 月 11～13 日にかけて、京都市にある国際日本文化研究センター（以下日文研）の講堂（11 日）及び第 1 共同研究室（12 日、13 日）にて実施された。その開催目的は、日本のメディアと大衆文化を探究する国内外研究者を、専門分野や研究歴の如何を問わず日文研へ招き、異なるメディアを対象とする各発表から見出される知の統合を通じて、国際的かつ立体的に「日本メディアと大衆文化史」を明らかにすることである。具体的には、日本と 400 年にわたる交流の歴史をもつオランダ出身・在住の 10 名を含め、総勢 20 名の研究者が一堂に会し、過去一世紀のあいだに日本のメディアと大衆文化が国内外社会にもたらした影響を議論した。

なお、本シンポには、「国際日本研究」の裾野をグローバルに拡大するという趣旨のもと、登壇者 20 名のうち約半数の 9 名が、「「国際日本研究」コンソーシアム」（以下コンソ）海外会員機関であるソウル大学日本研究所（1 名）、ライデン大学人文学部（3 名）、アムステルダム大学人文科学部（4 名）、アムステルダム自由大学人文社会科学部（1 名）の計 4 機関から登壇した。よって、

日文研を、専門分野を超えた学際的・国際的研究活動の中核拠点（ハブ）にし、各会員機関間の連携を促進する「コンソーシアム横断型国際共同研究」のパイロットケースとして、本シンポは位置付けられる。

また、登壇者には、大学院生3名に加え、博士号取得から5年未満のポスドク研究者・教員5名が含まれていたことから、本シンポは比較的キャリアの浅い研究者に対して、世界の第一線で活躍する研究者との交流機会をもたらし、世代・国家・学術領域の壁を超えたネットワーク構築を促す若手研究者支援の側面を持ち合わせていたことも、特筆に値する。

【成果 一放送 100 周年に見出された知一】

<1 日目>

本シンポは、東京大学副学長、日本マス・コミュニケーション学会（現・日本メディア学会）会長、デジタルアーカイブ学会長などを歴任、上演論的アプローチから都市論、メディア論を展開し、日本のカルチュラル・スタディーズで中心的な役割を果たしてきた社会学者の吉見俊哉氏（東京大学 名誉教授、國學院大学 教授）による基調講演「アメリカ・イン・ジャパン 1825-2025」で幕を開けた。

井上章一所長（日文研）による開催挨拶、続いて本シンポ運営代表者であるキャロリン・バードソール氏（アムステルダム大学 准教授）と太田奈名子准教授（日文研）による趣旨説明の後に始まった本講演は、講堂での対面参加のみならず、オンラインでの非対面参加もでき、かつ、対面・非対面どちらも日英語同時通訳付きで聴講できる形式で開催された。今年は日本放送 100 周年というタイミングに加え、戦後 80 年の節目でもあり、緊張する日米関係が極めて高い社会的関心を集めていることから、金曜の午後という時間帯にもかかわらず、本講演は京都所在大学の大学生・大学院生をはじめ、多くの一般来場者に恵まれた。結果として、一般来場者・オンライン参加者を含め、総勢 288 名が参加した。

本講演は、日本においてラジオ放送が始まった 1925 年からさらにもう一世紀遡り、幕府が異国船打ち払い令を出した 1825 年から今日までの日米関係史を根底から問い直すことによって、アメリカの存在とは切っても切り離せない日本のメディアと大衆文化史を再解釈するもので、5 部構成で進められた。

まず「1. トランプのアメリカ」で、日本はおそらく世界一の親米国家であるとの主張がなされ、「2. アメリカに包まれた日常（日本から視る）」で、日本国外では植民地支配からの解放・独立の象徴として建設される自由の女神が、日本では公園、温泉、パチンコ、ラブホテルに建てられ、政治的自由ではなく、むしろ経済的豊かさや気ままな自由さなど、アメリカに対する憧憬の象徴として存在することが指摘された。

「3. 西部開拓からペリー遠征へ（アメリカから視る）」では、「明白なる運命（Manifest Destiny）」という西欧中心主義的文明観に裏付けられた西漸運動の解説と、先住民から土地・資源を強奪してきたその思想が、トランプ大統領の就任演説にも明確に現れていたことが指摘された。1853 年という年に起きた日米の接触が、アメリカにとってはペリー艦隊東アジア遠征の一環としての日本来航でしかないが、日本にとっては脱亜入米（日本近代とアジアからの離脱の始まり）としての黒船来航と捉えられているとの違いに注目するという着眼点が提示された。

「4. 非対称なまなざし（2つの〈視る〉を比較する）」では、日米による 1853 年の解釈のズレが、例えば戦時中アメリカでは日本人が猿として描かれたのに対し、日本ではアメリカ人が鬼として描かれたという違いとも関連していることが述べられた。戦後、西漸運動の究極的な到達点ともいえるマッカーサーによる日本占領を経て、日本における親米感情が高まりをみせた末の東京ディズニーランド誕生は、自由の女神のような、アメリカ（アメリカ大衆文化）の日本（日本大衆文

化)への溶け込みの最たる例であることが示された。かつて日本のテレビで放送されていた、ディズニー映画などのアメリカのメディア作品が画面から飛び出してきたごとくに建設されたディズニーランドは、西部開拓・侵略が展開される植民地的世界を疑似体験する場であり、そうした場に心身を幾度と無く委ね、アメリカと意識的にも無意識的にも戯れることで、日本はいまだにアメリカという帝国に強烈に憧れつつ、東アジアに対して帝国としての眼差しを今もなお注ぎ続けている可能性が指摘された。

最後に「5.グローバルヒストリーのなかで」では、日本は海上交通によって16世紀にはオランダ、19世紀にはアメリカとの遭遇を契機に、近代化とグローバリゼーションを経験してきたが、スペイン・ポルトガルの拡張からオランダの独立、イギリスの拡張からアメリカの独立と、世界的にみれば150年単位で覇権が移動しているというグローバリゼーションの螺旋的展開構造が明らかにされた。日本が高度経済成長を迎えて以降、20世紀資本主義は限界に達し、冷戦終結後興隆したグローバリゼーションも衰退をみせているなかで、21世紀の現在、世界はアメリカの翳りとともに帝国主義の亡霊復活を目撃しているとの主張がなされた。ガザ地区所有構想などにより、アメリカの「明白なる運命」は幻想に過ぎないことが露呈されるなかで、日本はどのような外交的決断を下すのか。日本におけるアメリカ(日本人が眼差しを向けるアメリカ人・アメリカ文化)への眼差しと、アメリカにおける日本(アメリカ人が眼差しを向ける日本人・日本文化)への眼差しのすれ違い、このズレを直視し、ピントを合わせる手段としてメディアと大衆文化の歴史を振り返ることで、日米関係の今日的課題と対峙する重要性が強く訴えかけられた。

続いて、劉建輝教授(日文研)と太田准教授が司会を務めたパネルディスカッションでは、日本近現代史家の鄭知喜氏(ソウル大学校 助教)、メディアと政治経済学を専門とするヘンリー・ローレンス氏(ボードウィン大学 教授)、日本中古・中世文学者のイフォ・スミッツ氏(ライデン大学 教授)が吉見氏に加わった。

三者は基調講演の要点の数々を各々の専門から丁寧に振り返り、独自の視点から掘り下げた。鄭知喜氏は特に戦後日本の欲望と暴力にも繋がってきたアメリカのソフトパワーが、トランプ大統領の近年の高等教育への干渉により弱体化していることをめぐる世界的影響、ローレンス氏はアメリカ現地で肌で感じる同国の衰退と混乱、そのなかでこそ感じる多様化し、抵抗の手段として立ち上がってきたソーシャル・メディアの希望、スミッツ氏は日米関係を日本と中国の眼差しの交差と比較して考える可能性に言及したうえで、日本古典文化・文学がいかに映画など現代メディアによって創作され、表象され続けてきたのかという考察手法の有効性を軸に、日本メディアと大衆文化の過去、現在のみならず未来を含め、多角的かつ包括的な全体議論が行なわれた。

なお、本基調講演の様子は、『[毎日新聞](#)』に取り上げられた。2025年7月28日月曜日の夕刊4面(文化面)で「日米間に「まなざしの非対称性」 社会学者・吉見俊哉さんが講演」と題し、「「近代社会の原形にさかのぼるには200年単位で世界をみる必要がある」として、歴史的な流れを踏まえながら「日本からみたアメリカ」と「アメリカからみた日本」の違いを浮き彫りにした」講演会であったと紹介された。

また、本講演来場者アンケートからは、「アメリカと日本の歴史的な関係を新たな視点で学ぶことができた」、「近現代史を改めて見つめ直す機会」となった、「世界現代史の視点を勉強」した、日英語同時通訳付き講演が初めてで有り難かったなどの声が聞かれた。こうした反応から、本講演は総じて参加者の満足度が高いと同時に、日米関係史を大衆文化とメディアという観点から解釈しなおすという運営側の意図が参加者にしっかりと伝わった会であったと評価できる。

<2日目>

一般市民への公開を通じて、より開けた社会還元を達成した初日の基調講演に続き、本シンポ2

日目と3日目は研究者向けに実施された。エドワード・ボイル准教授（日文研）が司会を務めた2日目は、鄭知喜氏による基調講演“Radio Broadcasting in Transwar Japan and Horizons of (In)communicability”で始まった。アメリカ（GHQ）の支配と影響を強く受けた占領期日本ラジオ放送の重点的解説を通じて、ラジオというメディアそのものが円滑あるいは操作的なコミュニケーションを生んだのではなく、ラジオ放送に携わる人々、とりわけ集団聴取などの活動に従事した聴取者（リスナー）の協働した努力と改善が、受信力、つまりコミュニケーション感度を良くし、大衆の心身動員の成功に繋がったことが指摘された。この完璧な上意下達とは限らない、時に成功し、時に失敗する複雑な日本の放送発展の歴史的経緯に留意することにより、戦前から戦後にかけての日本のあり方の違う側面に光が当てられるのではないかと投げかけがあった。

セッション1「日本のオーディオ・ビジュアルメディアと大衆文化史（Japanese Audio-Visual Media and Popular Culture History）」では、聴覚メディアと視覚メディアの研究事例を別個に扱わず、まとめて連続して考察することで、新たな知見や考察視点の発見が試みられた。

安藤千穂子プロジェクト研究員（日文研）による発表“Characteristics of Portrait Photography and the Popularization of Photography in Japan in the Late 19th and Early 20th Century from a Contemporary Perspective”では、19世紀末から20世紀頭の日本において、身分の高い人々の間で親しまれていた写真が大衆化していった様相、そうした肖像写真の特徴、そしてその現代的意義が語られた。

マレック・ヤンコヴィッチ氏（アムステルダム自由大学 助教）による発表“Water, Air, Earth: Celluloid Film as a Threshold Between Natural Environment and the Japanese Photochemical Industry”では、映画をメディア媒体や文化的現象ではなく、グローバルに流通するフィルム（セルロイド）など、化学工業の生産物として分析するという、映画産業史及びメディア技術史研究の有効性と可能性が斬新に提起された。

入倉友紀氏（早稲田大学 講師）による発表“Silent Film Talks: Audio Drama Production for Gramophone Records and Radio”では、日本映画界が無声映画の時代からラジオ業界、レコード業界と緊密に関わり、弁士や映画俳優が参加する映画の音声ドラマ制作を通じて映画に声を与えるという、世界的に見ても珍しい試みがなされていたことが明らかにされ、映画とラジオ研究を架橋する具体例が示された。

アンドレア・ジョライ氏（ライデン大学 助教）による発表“Gagaku on the Airwaves: From Imperial Broadcasts to Echoes of the Past”では、大衆文化とは異なるものとして戦前から扱われ、研究されてきた雅楽が、大衆文化の礎を築いたラジオで流れていた可能性、しかし新聞ラジオ欄など視覚資料を除いてはラジオ放送という聴覚資料がほぼ現存しないことによる、芸術をめぐるメディア研究の限界が指摘された。

各発表後の全体討論では、普段の研究生活では見聞きすることのない大衆文化やメディアの事例に触れることにより、聴覚メディアと視覚メディアがいかに連携していたかというクロスメディアの事例に自身の興味関心を広げることができるという意見が述べられた。また、そうした事例にまで辿り着かなくとも、自分のメディア研究の補助線として、あるいは自身の研究により説得性をもたせるために、他のメディアとその歴史的発展経緯をめぐる知識が有用となるという意見も出た。本シンポという国際交流の場を通じて、グローバルなメディア史に自身の研究を位置付ける重要性を、身をもって学んだという感想も聞かれた。

セッション2「日本文学と大衆文化史（Japanese Literature and Popular Culture History）」では、各発表が文学という同じメディアを扱うことで、いかに日本固有の文化が独自の文学を生み、そうした文学が映画など異なるメディアによってどのように再生産され続けているかが議論された。

イフォ・スミッツ氏による発表“Japan’s Beginnings: Classical (Heian) Court Culture in Film, Television, and Manga”では、日本古典文学『源氏物語』がNHK大河ドラマ『光る君へ』をはじめテレビ・映画・漫画・アニメで繰り返し題材になることが取り上げられた。日本人のアイデンティティに関わる古典、特にその性描写が現代メディアで表現される際の限界と困難が指摘された。

ダフネ・ヴァン・デル・モーレン氏（ライデン大学 博士課程）による発表“Yosano Akiko’s Life in Biofiction: Contextualizing Hana no ran (1988) and its Reception”では、数々の伝記が出版されている与謝野晶子が主人公の映画『華の乱』を題材に、女性を取り上げるバイオフィクション作品制作の難しさが実際の場面再生とともに示された。とりわけ、与謝野の遺族からの批判など、作品受容についても紹介された。

アーフケ・ファン＝エーワイク氏（立教大学 日本学術振興会外国人特別研究員）による発表“Heroes and Heroines from Japanese History in Early Twentieth-Century Children’s Magazines”では、近代以前に出版された偉人伝・列女伝が、近代日本の児童雑誌におけるヒーロー・ヒロインとしていかに脚色、描写されたかが挿絵の比較により示され、さらにその出版過程では女性作家が介入できなかったことが指摘された。

駒居幸特任助教（日文研）による発表“Bento Borders: Unpacking Gender and Precarity in the Writings of Kirino Natsuo”では、桐野夏生作品における弁当の描写が取り上げられ、そこには非正規・低賃金労働や男女間格差などの社会的不平等が交錯しているとの主張がなされた。『OUT』の英訳版で幕の内弁当が Lunch of Champions となった事例を起点に、日英翻訳が英語圏の学術的解釈に与える影響も論じられた。

各発表後の全体討論では、文学というメディアでは比較的問題のない描写を、いかに映像という、より情報量の多いメディアで表現、再現するかという難しさ、また、歴史あるいは歴史を紡ぐテキストが、メディアを通して大衆文化となると、女性の生きづらさがどのようにナラティブとして語られ、また表象されるのかを考え続けることが、現代女性のそれを考える糧になりうるという、古典文学研究の現代的意義について議論が交わされた。加えて、メディアのコンテンツそのものではなく、誰がその語り手・読み手となるのかという、メディアの作り手・受け手の資料を収集、分析することの重要性も指摘された。

< 3日目 >

ザヘラ・モハッラミプール特任助教（日文研）が司会を務めた3日目は、ヘンリー・ローレンス氏による基調講演“100 Years of NHK: the Enduring Importance of Public Media in National Life”で始まった。受信料を主な財源とする公共放送であるBBCとNHKの共通点と相違点が順に解説され、まず共通点として、聴取者・視聴者に正確な情報、教育、娯楽を提供し、多様性を重んじつつ国家を結束させる指針を有することが紹介された。次に相違点として、BBCは政治の番人であり、文化・社会における変化をもたらし、民放各社と苛烈な競争を繰り広げるのに対し、NHKは政治の案内人であり、文化・社会における安定をもたらし、民放各社と共存する役割を果たしていることが指摘された。この比較考察の後、日本の放送100年が数々の人気番組の紹介とともに振り返られ、その教訓として、聴取者・視聴者の選択と要求が放送の内容と役割を変えうることで、そして、それがゆえに、民主主義を守るという価値が、民放と比較してNHKという公共放送にはより強くあることが強調された。

セッション3「日本の放送と大衆文化史 (Japanese Broadcasting and Popular Culture History)」では、NHKによる放送をめぐる発表が時系列順に続き、直前のローレンス氏、及び2日目の鄭知喜氏による基調講演を踏まえ、国家とメディアの関係が国際的視点から考察され、議論された。

スコット・コガ-ブラウズ氏（立命館大学 教授）による発表“‘Radio Towers’: NHK Builds Japan's

First Broadcast Audience”では、聴取者という集団を創成するため、(京都に複数現存する) ラジオ塔がなぜ公園に設置され、いかに利用されたかという歴史的経緯の解説が、ローカル資料の紹介を交えて行なわれた。1930 年代以降国家の支配が公共的時空間に及ぶ例としてラジオ塔研究が有用であることも指摘された。

キャロリン・バードソール氏による発表“NHK Radio Infrastructures: Broadcast Buildings, Material Culture and Recording Practices”では、放送と録音が行なわれる近代建築(インフラ)という切り口でラジオというメディアを研究する斬新な試みが披露された。ドイツ・日本・台湾・中国の事例比較から、聴覚文化研究や物質文化研究との親和性を高められるこの試みの有効性が示された。

ヴィンセント・カウテンブラウエル氏(アムステルダム大学 上級講師)による発表“Listening in: Dutch Monitoring of Japanese Wartime Propaganda in Indonesian Archipelago (1942-1946)”では、国境を越えるラジオ・プロパガンダ史研究の概要と、日本軍がオランダ領東インド(現インドネシア)に侵攻し、オランダ軍を降伏させた 1942 年から 1945 年に、オランダ軍が傍受した占領地向け日本軍放送が紹介された。

太田准教授による発表“100 Years of Pursuit of Happiness: The Japan-US Transwar History of Radio and Podcast Programs for Women”では、女性の幸福を軸に戦前ラジオから現代ポッドキャストまでを扱う「日本女性の声のメディア史」描出の展望が示された。NHK 放送博物館所蔵の占領期ラジオ番組『婦人の時間』台本が分析され、聴取者が親米民主的になるような幸福の語りの例が指摘された。

王令薇氏(江戸川大学 助教)による発表“Staging the Realities of Junior High School Students: A Gendered Perspective on NHK *Chuugakusei Nikki*”では、NHK テレビドラマ『中学生日記』に関し、学生役オーディション応募者のほとんどは女性であったが、制作者の大半は男性で、同作での女性の活躍場面が少ないことが指摘され、同様の青少年向け番組で女性の声を多く盛り込むという改善法が提案された。

各発表後の全体討論では、特定のコミュニティにおいて市民が互いを監視しながら心身を錬成するというラジオ塔を利用したラジオ体操が他の運動と比較して優れていた点、各国独自の放送局及び電波塔の近代建築デザインとコミュニケーション・システムの関係性、日本軍の放送を傍受したうえでオランダ軍が自国の放送内容を修正するなどした事例の有無、GHQ による日本女性の民主化(解放)の史実性を考えてアメリカの女性史と注意深く照応する必要性、青少年向けテレビ番組の考察をより精緻にするために子供が主人公の占領期ラジオ番組を参照する有効性について、質疑応答が交わされた。

セッション 4「日本アート・漫画・アニメと大衆文化史 (Japanese Art/Manga/Anime and Popular Culture History)」では、それ以前のセッション 1～3 に比べ、新しい分析対象を扱う発表が連なり、日本国外における国際日本研究として注目度の高いアート・漫画・アニメ研究の方法と意義が示された。

近藤貴子氏(アムステルダム大学 博士課程)による発表“Fuji Television Gallery 1970-2006: An Unsung Hero behind the Contemporization of Japan's Art World?”では、既に閉館したフジテレビギャラリーが紹介され、いかにフジテレビがその事業的特質を活かしつつ、テレビに加えて新聞・雑誌・アートというメディアを連携させて、日本のアートをポピュラーかつ国際的にする役割を果たしたかが明らかにされた。

リック・スパンジャース氏(アムステルダム大学 助教)による発表“Sketching Traditions: Historiographies of Manga in Manga by Mizuki Shigeru, Tatsumi Yoshihiro, and Ban Toshio”では、漫画家が歴史家となり、自らの作品で独自の歴史を創作するとのヒストリオグラフィーの考えに基

づき、伴俊男、辰巳ヨシヒロ、水木しげるの自伝的漫画がいかに海外出版を通じ国際的記憶を構築するかが分析された。

トーマス・メス氏（慶應義塾大学 専任講師）による発表“Consuming the Feminine, Commodifying the Rural in Studio Ghibli’s *Only Yesterday*”では、『おもひでぽろぽろ』を題材に、1970年代の国鉄キャンペーン「ディスカバー・ジャパン」にみられる「ガールスケイプ」というマーケティング手法が同スタジオジブリ映画にみられ、またそれが現在のジェンダーや農業のメディア表象の規範になっていると指摘された。

アンジェラ・ルイーズ・ロサリオ氏（シンガポール国立大学 博士課程）による発表“Menstruation in *Shōjo Manga*: (Re)Packaging Taboos and (Re)Shaping Menstrual Narratives”では、『ヒナのままじゃだめですか？』などの少女漫画における生理の描写が分析され、生理という社会や学校における秘匿の克服により、登場人物同士、また登場人物と読者同士も、孤独を乗り越える親密さで繋がることの主張がなされた。

各発表後の全体討論では、新聞社がデパートとアートギャラリー（百貨店展覧会）を創るというある種の伝統の系譜にフジテレビギャラリーの事例を布置して考察する可能性、アメリカやベルギーあるいは世界でもまだ例がないなか日本政府が他のメディアとの親和性のある国立漫画アーカイブを建設する意義、アメリカでもみられる若者の地方移住（いわゆる田舎暮らしや、農村・自給自足生活）へメディアが与える影響及び男性中心のアニメ会社が女性主人公の映画を制作する意味、今日の漫画からより古い時代の映画まで研究対象を拡大し、男性読者の反応を含めて生理の描写を考える必要性について議論が交わされた。

全てのセッションが終了した後、閉会挨拶の際には、各登壇者が一人ずつ感想を述べた。「教員に限らず、参加前段階の準備・手続きを含め、非常に多くの職員が日文研に温かく迎え入れてくれたことに感謝している」、「会場で白熱した議論が交わせたのはもちろんのこと、休憩中などにもベテラン・若手の垣根を超えた対話ができたり、新たな共同研究の可能性についてグループで協議できたりするなど、本シンポは極めて友好的に進んだ」、「本シンポという公式の学術研究の場が、非常に高い国際性及び領域横断性を有していたがゆえに、それぞれの発表を、自身の研究と関連付けなければと必死に聞くのではなく、純粋に没頭し、楽しめたことが何より貴重であった」、などの声が聞かれた。

以上のように本シンポは、登壇者皆に惜しまれながら、3日間の幕を閉じた。

【展望 一放送 100 周年に見出された課題一】

3日間にわたる本シンポの成果は、「京都ラジオ塔デジタルアーカイブ」、及び日英蘭3か国語「日本メディアの大衆文化史タイムライン」といったデジタル・ヒューマニティーズの成果物として、2025年度末を目処に落とし込まれ、学術知の京都という地域コミュニティへの還元、さらには国際的社会還元が果たされる計画である。加えて、2025年11月15日土曜日開催の日文研一般公開「日本放送100周年 —メディアから日本をかんがえよう！—」において、本シンポでの議論の一部をポスター掲示して紹介するなど、学術的成果はさらに多くの市民へ広く還元される予定である。

なお、本シンポは、太田准教授が2025年5月20～31日、人間文化研究機構の支援によって、海外コンソ会員機関である[アムステルダム大学](#)へと渡って研究調査活動を行なった「令和7年度NIHU若手研究者海外派遣プログラム」（短期派遣）の連続的成果でもある。具体的には、同プログラムの支援により、日文研の第4期（2022～2027年度）機関拠点型基幹研究プロジェクト「『国際日本研究』コンソーシアムのグローバルな新展開 —『国際日本研究』の先導と開拓—」を推進する研究課題「「グローバル・ポップ・カルチャー・ヒストリー」の創発的展開」が遂行できた。

その一環として、2025 年 5 月 23 日アムステルダム大学にて、「「国際日本研究」で世界を架橋する—日語研を拠点としたポップ・カルチャー研究の可能性— (Building Bridges for “International Japanese Studies”: the Potential of Popular Culture Studies based at Nichibunken)」という、本シンポの前哨戦となる[プレ・セミナー](#)を開催できた。この 5 月のプレ・セミナーは、登壇者を含め参加者 20 名強の比較的小規模なものではあったが、本シンポで来日する登壇者 6 名がアムステルダム大学及びライデン大学から参加したこともあり、2 か月後に控えたシンポの円滑な運営の足がかりを築く素晴らしい機会であった。

興味深いことに、「海外派遣プログラム」実現に惜しみない協力をしてくださったキャロリン・バードソール氏の呼びかけを通じて、オランダより本シンポに参加したライデン大学、アムステルダム大学、アムステルダム自由大学所属の研究者は、オランダという同じ国にいる研究者であっても、各々が旧知の仲とは限らないため、今回日語研にてオランダ国内の日本研究やメディア研究のトレンドをめぐる情報交換を盛んに行なった。結果、三大学間で新たな交流研究会の開催を検討しているとの報告を受けた。このように、日語研は、世界における国際的研究活動の中核拠点にも、またオランダという海外一国内での日本研究活動興隆と発展のハブにもなり得ること、言い換えれば、グローバルにもローカルにも、日本研究を通じて友好親善、相互理解増進に寄与できることが証明された。

上記にとどまらず、太田准教授は、本シンポで見出された課題を引き続き検討するとともに、成果を持続的に発展させ、そのインパクトをより一層拡大していくために、本シンポに登壇した若手研究者 4 名を共同研究者に迎え、「令和 7 年度所長裁量経費」（研究課題名「女性の声をめぐる日本メディアと大衆文化史 —ポッドキャストによるデジタル・ヒューマニティーズ実践—」）をすでに獲得済みである。

このように、本シンポは、日語研がコンソを新展開させていくうえでの一つのモデルケースを提示した。そして、その成果は単にシンポ終了とともに潰えてしまうことなく、2025 年 7 月 11～13 日の 3 日間で集中的に構築された、信頼できる多元的ネットワークをもとに、「日本メディアと大衆文化史」研究におけるデジタル・ヒューマニティーズ活用の検討をはじめ、これからも萌芽的・創発的研究を生み出していく。「令和 7 年度 NIHU 若手研究者海外派遣プログラム」を出発点に、本シンポを経て、「令和 7 年度所長裁量経費」に基づく調査へと研究成果が展開していく過程は、本シンポ登壇者がいつでも参照して研究活動の糧にできるよう、太田准教授の管理する[Instagram](#)にまとめられている。

末筆ながら、本シンポ実現のためコンソに加盟してくださった共同主催者・アムステルダム大学人文科学部、多大なるご支援を賜った後援・一般財団法人国際日本文化研究交流財団、本シンポ実現にお力添えくださった日語研教職員の方々に、厚く御礼申し上げます。

文責：太田奈名子（日語研 准教授）